

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 ZHENG Qiong hua
学位 博士(文学)
学位記番号 新大院博(文)第59号
学位授与の日付 令和2年9月23日
学位授与の要件 学位規則第3条第3項該当
博士論文名 中国語の「動相形式」“着”に関する研究
——「線状視点」からの検討を中心に——

論文審査委員 主査教授 朱継征
副査教授 大竹芳夫
副査准教授 山田陽子

博士論文の要旨

中国語の動相形式“着”に関しては、多くの言語学者により様々な角度から研究され、活発な論争が行われている。“着”は静的状態を表さず、動的状態を表すという説がある一方、持続を表さず、進行中を表すという説もある。逆に、動的状態を表さず、静的状態を表すという説もあれば、進行、残存を表さず、持続だけ表すという説もある。諸説はそれぞれ、個別的、断片的現象を漠然と解釈できそうな場合もあるが、何れも“着”の本質を掴んでおらず、合理的に“着”の本質を解釈できていない。

本論文は、動相形式“着”を研究対象として広範なデータを分析しながら、“着”と動詞の共起関係を考察し、動相形式“在”、“了”との比較、そして構文環境の考察、分析を通して、“着”の本質を体系的に明らかにしたものである。

本論文は次の7章から構成される。

第1章 序論

第2章 “着”の本質に関する本論文の捉え方

第3章 動詞と“着”の共起関係から見る“着”の「線状視点」

第4章 “V着”と“V了”の違いから見る“着”の「線状視点」

第5章 “着”と“在”の違いから見る“着”の「線状視点」

第6章 “着”と“完句成分”から見る“着”の「線状視点」

第7章 終章

第1章では、まず動相形式“着”を研究対象として限定し、“着”の文法化の過程、研究目的、方法を紹介した。また動相諸形式に定義を与え、本論文の構成と概要を述べた。

第2章では、“着”に関する先行研究の成果を整理し、その問題点を指摘した上で、“着”が「線状視点」という捉え方を表す動相形式であると指摘した。そして「線状視点」を、被写体を追跡する動画撮影方式の捉え方であると定義し、「線状過程」を、被写体を追跡する動画撮影方式で捉えた時間的幅のあるプロセスであると定義した。

第3章から第5章までは“着”が「線状視点」という捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性に関して、動詞との共起関係、他の動相形式との比較や構文形式との関わりから検証を行った。

第3章では、先行研究の動詞分類を検討しながら、“着”と共起可能な動詞を「持続動詞」、共起不可能な動詞を「非持続動詞」と呼ぶことにした。「持続動詞」は時間的幅を持つが、これは“着”と共起可能となるために必要不可欠の要因であること、一方の「非持続動詞」は時間的幅を持たないが、これは“着”と共起不可能となる根本的原因であることを指摘した。こうした動詞分類により、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であることが裏付けられた。

第4章では、存在文における“着”と“了”の意味的相違について考察した。存在文における“着”は残存結果の線状過程を表す文法形式であり、“了”は残存状態の始点を表す文法形式であると指摘した。これにより、存在文における“着”と“了”の意味的相違を明らかにしたのと同時に、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性も裏付けられた。

第5章では、進行相形式としての“着”と“在”の異同について考察し、“着”は被写体を追跡する動画撮影方式の捉え方であり、“在”は時空間座標の下での写真撮影方式の捉え方であると指摘した。これにより、“着”と“在”の使い分けを明らかにしたのと同時に、もう一つの側面から“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性が裏付けられた。

第6章では、“V着”構文の成立条件について考察した。文脈を欠いた“V着”だけの構文は成立しにくい。語気助詞“呢”、数量表現、連体修飾語、様態描写の連用修飾語、前後の文脈などの要素があれば、“V着”構文が成立しやすいという先行研究の指摘があるが、その深層的理由については説明されていない。本論文は、これらの要素は様々な構文成分であるが、「線状過程」を示すという点で共通しており、“V着”構文の成立条件として、「線状過程」を示す要素が不可欠であることを指摘した。

第7章では、動相形式“着”の本質について体系的に説明し、本論文の研究成果をまとめ、今後の研究課題を示した。

審査結果の要旨

鄭瓊花氏の論文は、先行研究の問題点を指摘した上で、“着”と動詞の共起関係を考察し、存在文における“着”と“了”の意味的相違、動相形式としての“着”と“在”の使い分け、そして“V着”構文の成立条件を明らかにしたことにより、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を体系的に裏付けた。

考察と分析の結果、以下の研究成果が得られたことは評価に値する。

1) “着”と動詞の共起関係を考察、分析したことにより、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を裏付けた。

2) 存在文における“着”は残存結果の線状過程を表す文法形式であり、“了”は残存状態の始点を表す文法形式であると指摘した。両者の意味的相違を明らかにしたことにより、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を裏付けた。

3) 進行相形式としての“着”は被写体を追跡する動画撮影方式の捉え方であり、“在”は時空間座標の下での写真撮影方式の捉え方であると指摘し、両者の認知の仕方の相違を明らかにしたことにより、もう一つの側面から“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を裏付けた。

4) 語気助詞“呢”、数量表現、連体修飾語、様態描写の連用修飾語、前後の文脈などの要素は様々な構文成分であるが、「線状過程」を示すという点で共通している。“V着”構文の成立条件として、「線状過程」を示す要素が不可欠であると指摘したことにより、複数の側面から“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を裏付けた。

鄭瓊花氏の論文の大きな意義は、“着”と動詞の共起関係、“着”と“了”の意味的相違、“着”と“在”の認知の仕方の相違、“着”と様々な「線状過程」を示す要素の関係などを明らかにしたことにより、様々な側面から、“着”の本質が「線状視点」の捉え方を表す動相形式であるという仮説の妥当性を裏付けたことにある。

以上から本論文審査委員会は、当論文が博士論文として十分な水準に達していること、また言語学固有の分野に関する内容の論文であることから、博士(文学)の学位を授与するに値するものであると結論づけた。